科目名	看護実践の思考 Assesment of Nursing Practice	担当教員 (研究室番号)	灘波 浩子(203)、他	教員への連絡方法 (メールアドレス)	

履修年次	2年次 前期	科目区分	専門科目・実践基盤看護学	選択区分	必修	単位数 (時間)	1(30)	授業形態	演習	科目等履修生	否
										ｵｰﾌﾟﾝｸﾗｽ	否

科目目的	個々の対象者の状況を推測・判断し、看護を実践する際の基盤となる思考過程を学ぶ。	
ﾃﾞｨﾌﾟﾛﾏ・ﾎﾟﾘｼｰ(DP)	主要なDP	E　地域社会に暮らす人々の生活支援において必要となる 情報を分析し、健康課題を解決するための方策を考えることができる。（思考・判断）
	関連するDP	G 看護学に対する研究的視点をもち、主体的に学ぶ姿勢を有している。（関心・意欲） C 多様な考え方や文化的背景を持つ人々の特徴に応じて、自らの看護活動の必要性や方法を説明するためのコミュニケーション能力を有している。（技能・表現）
到達目標	1. 事例患者の様子から気がかりを見い出すことができる。 2. 事例患者を知るために必要な知識や情報を主体的な学習によって補充できる。 3. 事例患者から得た情報を解釈できる。 4. 事例患者に必要な援助を列挙できる。 5. 事例患者の特徴・状況に応じた援助を具体的に言語化できる。 6. 実施した援助や関わりを振り返る視点を説明できる。 7. 責任を持って自己学習を行うとともに積極的に意見交換を行い、グループに貢献できる。	
成績評価方法 (基準)	個人レポート70点（評価1回目：24点、評価2回目：46点)、パフォーマンス20点、貢献度10点による総合評価を行う。 ＊個人レポート2回目・レポート合計点・総合点は、それぞれ60%以上の評価点を単位認定条件とする。 ＊個人レポート・パフォーマンス・貢献度の評価項目は後日公表する。	
再試験の有無と基準等	課題レポートが合格基準に達しない者のうち、本人からの申請を担当教員が認めた場合、再度レポートを提出することができる。	
教科書	三上れつ・小松万喜子編：看護学テキストNICE　ヘルスアセスメント，改訂第2版，南江堂 高橋照子編: 看護学テキストNICE　看護学原論，改訂第3版，南江堂，2020. 香春知永・齋藤やよい編：看護学テキストNICE　基礎看護技術，改訂第3版，南江堂	
参考書等	授業内で適宜紹介する。	
学生の主体性を伸ばすための教育方法と学生への期待	この授業では、基礎看護学実習で出会う対象者に適切な看護を提供できるようになるために必要な思考を学びます。適切な看護を実践するために必要な思考は、簡単に身につくものではありません。これまで学んできた知識だけでなく、新たな学習も行いながら、持てる知識と気力と時間をフル活用して取り組み、ぜひ自分のモノにしてください。 また、授業は学習者の能動的な学習への参加を基盤に仲間と共に学び合う協同学習を取り入れて進めます。それぞれが責任を持って事前・事後課題に取り組み、グループの中でそれぞれの役割を果たしつつ、事例患者の看護について多方面から検討し、思考を深めていきましょう。	
備考	グループは、多様な学生が学び合うことをねらいとして、途中で再編成することがある。	

回	学習項目	学習内容	主担当教員	授業方法
１回	オリエンテーション 看護実践に必要な要素と思考プロセス	オリエンテーション：学習概要、課題説明 看護師の思考過程を学ぶ意義 看護実践を構成する要素 看護過程、看護診断の概要	灘波、他	講義
２回	事例A：看護師の思考過程	事例Aを通して、看護師の実践と思考の過程を知る。	灘波、他	講義 演習
３回	事例B：気づく・解釈する１	事例患者Bの映像から、看護師のように「気づく」ための必要な情報を列挙し、情報の解釈を行う。	灘波、他	講義 演習
４回	事例B：気づく・解釈する２	映像から気づいた事例患者の状況（基本的欲求・病状）について、様々なタイプの推論を用いて、患者を把握する。	灘波、他	演習
５回	事例B：介入する	事例患者Bに必要な介入（関わり・援助）を決定し、そのための方法を検討する。	灘波、他	演習
６回	事例B：振り返る	事例患者Bに実施した介入について、行為中・行為のあとの振り返りを行い、次の方針を導く。	灘波、他	演習
７回	事例C：患者紹介・受け持ち準備	事例患者Cの紹介を受け、対象者に必要な援助を提供するために必要な知識や技術を整理する。	灘波、他	演習
８回	事例C：気づく・解釈する１	事例患者Cから、看護師のように「気づく」ための必要な情報を列挙し、情報の解釈、推論を行う。	灘波、他	演習
９回	事例C：気づく・解釈する２	事例患者Cに必要な介入（関わり・援助）を決定し、そのための方法を検討する。	灘波、他	演習
１０回	事例C：介入する1	事例患者Cに必要な介入（関わり・援助）を実施する。 行為中の振り返りも意識して行う。	灘波、他	演習

１１回	事例C：前回の振り返りと記録	事例患者Cに実施した介入（関わり・援助）を振り返り、新たな気づきを踏まえながら、患者の状況や自分たちの関わりの意味を解釈する。→患者に適した方法を再検討する。	灘波、他	演習
１２回	事例C：介入２と振り返り	事例患者Cに必要な介入（関わり・援助）を再度実施する。 行為中の振り返りも意識して行う。	灘波、他	演習
13回	事例C：全体の振り返り	事例患者Cとの関わり全体を振り返り、患者Cの状態、自分たちが行った看護について整理する。	灘波、他	演習
14回	発表	グループごとに自分たちが担当した患者への看護について発表する。	灘波、他	演習
15回	まとめ	これまで学んできた看護実践の思考過程を整理する。	灘波、他	講義 演習

学　習　課　題

1回目（事前）：テキスト等から、看護過程／看護診断／臨床判断を調べ、相違点を列挙する。
（事後）：看護過程と看護診断の概要をワークシートに整理する。

2回目（事後）：事例Ａを振り返り、看護師の思考プロセスの要素を整理する。

3回目（事後）：事例Ｂを理解するために必要な学習を行い、事例Ｂ映像から気づいたモノ・コトを解釈する。

4回目（事前）：事例Ｂをより理解するために必要な情報（観察項目など）を記録用紙に列挙する。
（事後）：電子カルテや映像から自分が把握した事例Ｂの状況を記録用紙に整理し、気づいたことを解釈する。

5回目（事前）：情報の意味付けを説明できるように、その根拠を明確にする。
（事後）：意味付けから導き出された援助の具体策（援助計画）を記録用紙に記載する。

6回目（事後）：事例Ｂに介入した際の詳細な内容（実施方法、患者の反応など）を振り返り、患者にとっての意味を考える。
上記を記録用紙に整理し、提出する。（配点：24点）

7回目（事前）：これまでの学習を振り返り、患者を受け持つにあたり必要な知識や情報収集の項目を列挙する。
（事後）：事例Ｃの紹介を受け、必要な知識・技術を補充する（自己学習したことをファイルに綴じる）。

8回目（事前）：気づくために必要な情報（観察項目など）を記録用紙に列挙する。
（事後）：電子カルテや映像から自分が把握した事例Ｃの状況・解釈した内容を記録用紙に整理し提出する。

9回目（事前）：情報の意味付けを説明できるように、その根拠を明確にする。
（事後）：意味付けから導き出された介入（関わり・援助）の具体的な方法（援助計画）を記録用紙に記載する。

10回目（事前）：模擬患者に介入できるように、自己の知識・技術の完成度を高める。
（事後）：介入した際の詳細な内容（実施方法、模擬患者の反応など）を記録用紙に記載する。

11回目（事後）：患者に実施した介入を振り返ることで、患者により適した計画を見い出し、記録用紙に記載する。

12回目（事後）：介入時の状況、介入の結果を振り返り、記録に整理する。

13回目（事後）：意味付けから導き出された介入（関わり・援助）の具体的な方法（援助計画）を記録用紙に記載する。
指定された記録全てをファイルに綴じ、期日までに提出する。（配点：46点）

14回目（事前）：患者との関わり全体を振り返り、患者の状態、自分たちが行った看護について整理し、発表できるように準備する。

15回目（事前）：これまで取り組んだ学習内容を整理する。

実務経験を活かした教育の取組

・担当教員は、全員看護職として実務経験がある。看護の実践及び教育・研究活動を行っており、その経験を活かして本授業の講義及び演習を行う。